

2024年1月14日 説教「天地の主である神」

使徒の働き 17章 24～34節

クリスマスから年末年始を経て、今朝からは再び使徒の働きの学びへと戻ります。使徒パウロがアジアからヨーロッパであるピリピからテサロニケ、ペレヤを経て、アテネにやって来て、アレオパゴスでの説教を始めたところまで読みました。アテネにある偶像の数々を見て憤慨していたパウロですが、説教冒頭では彼らのありかたについて、「宗教心に熱い人々」という誉め言葉で始めながら、「知られざる神に」と刻まれた祭壇のことを話しの最初に出し、福音を語り始めていったのです。



1. 創造主なる神 (24～26節)

- ①天地の主 (24)「この世界とそこにあるすべてのものをお造りになった神は、天地の主ですから、手でこしらえた宮などにはお住みになりません。」

世界とすべてのものを造られた神という概念は、アテネの人々には耳新しかったことでしょう。そして、その方が地上世界ばかりでなく天まで支配する主であると言うのですから驚いたかもしれません。さらに、その方は人間の手でこしらえた宮などにはお住みになりません、とパルテノン神殿を指さしながら言われると聞かされる者はどきどきとしたことでしょう。

- ②息と万物を (25)「また、何かに不自由なことでもあるかのように、人の手によって仕えられる必要はありません。神は、すべての人に、いのちと息と万物とをお与えになった方だからです。」

神は私たち人間が何かをすることによって成り立つようなお方ではないのです。なぜならば、神は創造者であり、人間に命を与え息をさせてくださる主。また万物を私たちに備えてくださった方だから、人間が仕えるかどうかに関わりなく存在しておられるのだとパウロは言うのです。

- ③地の全面に住ませ (26)「神は、ひとりの人からすべての国の人々を造り出して、地の全面に住ませ、それぞれに決められた時代と、その住まいの境界線とお定めになりました。」

その神は、創造された一人の人間(アダム)から全ての民族の人々をお造りになって、すべての地域に住ませられました。神はまた、民をそれぞれの時代に生かし、彼らが生きる国の境界線をお定めくださったと、パウロは述べるのでした。

2. よみがえった主 (27～31節)

- ①神を求めさせるため (27)「これは、神を求めさせるためであって、もし探り求めることでもあるなら、神を見いだすこともあるのです。確かに、神は、私たちひとりひとりから遠く離れてはおられません。」

時代や国をどうして存在しているのでしょうか。それは、時代及び国において、民が神を求めるためでした。また、求道していくならば、彼らが神を見いだすこととなるからです。実際、神はどこにあって近くにいるか



さる方だからです、とパウロは伝えます。

- ②神の子孫(28~29)「私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです。あなたがたのある詩人たちも『私たちもまたその子孫である』と言ったとおりです。そのように私たちは神の子孫ですから、神を、人間の技術や工夫で造った金や銀や石などの像と同じものと考えてはいけません。」

神を認めるも認めないも、私たちは神の中に生き、動き、存在しているんですよ!とパウロは訴えかけます。それは、ギリシャの詩人たちによって「私たちも神の子孫だ」と言っている通りです。一方で神についての理解については、正しています。つまり、神をこの町にたくさん並んでいる像と同じにしてはならないというのです。それらは人間が工夫をこらして、金や銀や石で作ったものではありませんか、と彼は述べます。

- ③悔い改めを命じ(30~31)「神は、そのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます。なぜなら、神は、お立てになったひとりの人により義をもってこの世界をさばくため、日を決めておられるからです。そして、その方を死者の中からよみがえらせることによって、このことの確証をすべての人にお与えになったのです。」

神ならぬものが崇められてきたことは事実であり、神はその無知を見過ごしてこられました。しかし、今ここにきて神はすべての人々が悔い改めることを求めておられるのです。それは、一人の方が立てられて地上に来られ、その義をもって人を救い、またまことの神を受け入れるかどうかにおいて、この世を裁こうとしておられるからです。この方は人の救いのために十字架上で死によみがえられた方です。人はこの方を救い主として信じ、悔い改めることによって救われていくのですと彼は宣べました。

3. 信仰に入った者たち(32~34節)

- ①あざ笑う人々(32)「死者の復活のことを聞くと、ある者たちはあざ笑い、ほかの者達は、『このことについては、またいつか聞くことにしよう』と言った。」

ところが、死者の復活のことが話しの中に出ると、あざ笑う者や、相手にしない人々がいました。アテネの民の考え方がそこに示されています。

- ②パウロは出て(33)「こうして、パウロは彼らの中から出て行った。」

そんなことから、パウロはそれ以上話さず、そこから出ていきました。

- ③彼につき従って(34)「しかし、彼につき従って信仰に入った者たちもいた。それは、アレオパゴスの裁判官デオヌシオ、ダマリスという女、その他の人々であった。」

アテネにおける働きを通しては、これまでのピリピ、テサロニケ、ベレヤなどと比較すると信ずる者は多くありませんでした。しかし、その中でも、信仰に入った者たちもいました。アレオパゴスの裁判官デオヌシオ、ダマリスの女などがいたとあります。

《結論》アテネは京都のような所でありました。文化や学問の中心地でしたが、町中にはたくさんの刻まれた像がありました。

パウロはアテネのアレオパゴスという小高い丘の上にある評議所に連れて行かれ、彼の教えを述べるようにと言われました。彼らが、耳新しいことを聞きたいと思ったからです。そこで、パウロは語りだしました。まずアテネの人々をほめました。「私はあなたがたが宗教心に熱い方々だと見ております」と伝えたのです。そして、彼が町を回っている時に見つけた「知られない神に」と刻まれた祭壇のことをとりあげて、「そこで、あなたがたが知らずに拝んでいるものを、教えましょう」と切り出しました。

第一に、パウロが語ったのは、天地の創造主なる神についてでした。アテネにあるパルテオン神殿はアテネの守護神である女神アテナの神殿でした。それを指さすようにして、あれだけ立派な神殿であったとしても、天地の主はそこには住むことはできませんと大胆に述べました。また、天地の創造主は、名匠がなたで造り銀や金で飾ったものであっても、ものも言えず、歩けないのでいちいち運んでやらなければならない存在ではなく、生ける神です、とこしえの主ですと語り次いだのです(エレミヤ書10章参照)。

第二に、パウロは統治者である神について伝えます。つまり、その方は国や民族を支配し、時代や歴史を治めておられる神だということです。当時は地中海世界が主たる世界だと覚えられていました。パウロは地中海を船でわたり、陸地もアジアからヨーロッパ世界へと旅をしてきましたが、それらよりはるかに広い世界があることを推測していたことでしょう。それらすべてを支配する神が、信じ伝えている神であると彼は伝えました。

第三に救い主であり裁き主である神を伝えました。アテネの人々も世界の人々も、永遠の神について、なんとなく知っていたのです。「神の目に見えない本性、すなわち永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らには弁解の余地がないのです」(ローマ1:20)とある通りです。これまでは、見過ごしておられた神も今や、どこの地の人でも悔い改めて、立ち返る時が来ていることを伝え勧めたのです。そして、イエス・キリストが救いを与えるために、十字架にかかってよみがえられたことを伝えました。また、この方がさばき主であって、信じる者には命が与えられることを宣べ伝えたのです。

新島襄は京都という地で宣教を行い、キリスト教信仰に基づく同志社を設立しました。京都という地には寺がたくさんあることは確かですが、今では教会も多くある地となっています。日本の地における宣教や信仰は、決して容易なものではありません。八百万(やおろず)の神があるなかに、宣教する時にはパウロのアレオパゴスの説教から学んでいきましょう。また、京都の例にもあるように、千葉、市原、姉ヶ崎の地でもキリスト教徒と教会が増えていくように祈りましょう。また、偶像礼拝から解放され、天地の創造主である神をあがめ、復活したキリストを心から信ずる方々が多く与えられていくように祈っていただくではありませんか。